

はじめに

私はカント倫理学について、すばらしい倫理学説であると思っています。私が「すばらしい」というのは、当時としては画期的であった（しかし今は通用しない）という歴史的な意味でも、読み物として面白い（ただし妥当性云々^{うんぬん}は別）という個人の刹那的な欲求を満たしてくれるという意味でもなく、それが私たちにとって生きる上での指針となり、糧となるという意味においてです。

では、そのカント倫理学とは、いったいいかなるものなのでしょう。その特徴について一言で表現すると、それは人の内面に関心を寄せ、評価する思想と言えます。短期的な成果や結果ばかりが求められ、人の内面が蔑ろ^{ないがし}にされがちな今の世の中（特に日本）にあつては、とりわけ学ぶことの多い考え方であると私は思っています。

また、カントの説く「人の内面に存する価値」というのにも、大きな特徴があります。それは、一部の人のみが有するような特別な才能や知識、また運といった偶発的要素は必要ないということ。この「その扉は万人に、常に開かれている^{*1}」という点に私は魅力を感じるので

す。

ここで本書の流れについて簡単に説明しておきます。まず序章において、カント倫理学の骨格部分を描き出していきます。具体的には「善とは何か?」「悪とは何か?」ということであり、また、それを追い求めたり、避けたりする術すべについてです。

それに続く第一章からは、その骨格部分に肉づけをしていきます。具体的には、カント倫理学の理論を個別の応用倫理学のテーマと絡めて論じていく作業になります。ここでは、「ビジネス倫理」「道徳教育」「生殖・医療倫理」「環境倫理」「AI倫理」「差別に関わる倫理」といったテーマについて扱っていきます。これらのテーマを選んだ理由は、今まさに顕在化し、早急な対策が求められる倫理的な問いを含むこと、そして、カント倫理学と絡めて論じることが有効であると判断したためです。

最初の二つのテーマ、すなわち「ビジネス倫理」と「道徳教育」にまつわる問いについては、カント自身がある程度対峙たいじしています。しかし、それ以外のテーマに関する問いの多くは、彼の生前にはそもそも存在していませんでした。そのため当然のことながら、それらについてカント自身は何も語っていないことになりました。

するとここで、本書に対して疑念が浮かぶかもしれません。つまり、内容がこじつけになることへの疑念です。しかし、心配には及びません。というのも、どれだけ人類の科学技術が進

歩しようとも、そして、それによっていくらか人々のライフスタイルが変わろうとも、人間の抱える倫理的問題の本質というのは、そうそう変わるものではないからです。

さはさりながら、偉大な先哲カントといえども人間であり、限界があります。カントの考え方は時代遅れの面や、それどころか当時から（そして今なお）不評である点、また、不整合をきたしているように見える点も少なくありません。そういった問題含みの点についても、本書でははっきりと指摘していくつもりでいます。

そのようにして、カントの至らなかつた面を差し引いたとしても、それでもなお、私は彼の倫理学説は傾聴に値する、すばらしい倫理学説であると思っています。

- これ以降の章において、引用文に限り、引用元にある強調は傍点によって示します。傍線は筆者による強調になります。亀甲括弧「」は筆者による補足です。
- 「道徳」と「倫理」という類似の用語が頻繁に出てきますが、意味上差異はありません。